火炎瓶
1967 10月21日
号外NO7
共産主義者同盟関西地方委員会発行

11/12「佐藤訪米阻止」斗争を斗い、安保条約を粉砕せよ!!

同志諸君!10/8羽田斗争に引きつづき、11/12佐藤訪米阻止斗争を斗わなければならない。10/21以降の斗争スケジュールは以下の通りである。

10月21日　国際反戦斗争、
10月26日　公務員債斗、
11月2日　沖縄ゼネスト
11月3日　左派「佐藤訪米阻止、七〇年安保粉砕全関西総決起集会」
11月5日　日本共産党、中央集会、
11月10日　各大学、学生大会
11月11日　全学連ゼネスト
11月12日　羽田斗争、実力斗争、
11月21日　国労動法斗争、
12日　原子空母、

10・8羽田斗争と11・12訪米斗争は、まったく一体となった斗いである。10/8訪ベト実力斗争は必然的に11・12佐藤訪米阻止斗争にみちびかれなければならない。何故なら、日本帝国主義の東南アジア、特にベトナム侵略は、日本の東南アジア侵略と、訪韓、訪台にいきつづく佐藤の対中国、対、人民斗争に対する羽田と対抗のためのものであり、ズルジョアジーはこれを「極東の安全」と「防衛」とよんでいる。そ、て、これは、当然、沖縄を媒介とした「日本の防衛」「安全」、即ち「七〇年安保条約」を、すでにそのうちに含んでいるのである。だから、10・8羽田訪ベト斗争を、共産主義者は、ベトナム戦争参加阻反対、即ち、反戦の枠の中で評価するだけでは不十分なのである。羽田斗争は、明らかに、日本及び「極東の安全」と「防衛」すなわち、侵略と反共と、人民の抑圧を明確にしていることを公然と明らかにしなければならないのである。たしかに大衆は、アメリカ帝国主義の露骨直接即ちベトナム戦に対する帝国主義戦争に対する批判とベトナム人民への同情、日本はこの戦争に対してボウ観決したところから「ベトナム戦争」を批判して来ていたのだが、訪ベトによって、日本が直接的にベトナム戦争に加担したことに対する怒り、反対!という態度をとっている。現在、重要なことは、すでに、日本は、はっきりと「ベトナム戦争」に加担し、侵略していること、政府が、このようにはっきしまった時、今我々は、何をしたらよいのかということである。

すでに日本は、極東の防衛、日本の防衛に一歩踏みこんでいるということであり、訪ベト、訪米は、この反共防衛、侵略、弾圧、搾取、抑圧、そして帝国主義戦争の係数の具体的一歩だということである。そしてこれは、七〇年安保が、消極的なものではなく、積極的な侵略のためのものであることをはっきりとさせたことである。

訪米と訪ベトは、七〇年安保斗争と、これにいたる過程、即ち、この我々が当面している階級斗争の第三期の階級斗争の基本的性格をあきらかにもはっきりとさせた。

そして我々は、この第三期階級斗争に対する基本的な斗いかたを「訪ベト」斗争で示すことが出来たのである。

我々は、この「第三期」階級斗争を斗いぬかねばならない。「佐藤訪米斗争」をもっと目的意識的に準備することによって、実力斗争として斗わなければならない。防衛において、組織において、大衆討論と。

そして、我々は、もっと準備し、より大きな、衝激力をもって、佐藤訪米実力阻止斗争を斗え!

訪米阻止斗争は、はっきりと、七〇年安保斗争のことである。安保斗争を、明日、明明日、そしてその翌日として考えているかぎり、我々は決して裏切られることはない。然し、安保は、果して明日の、はてしなくつづく明日の事だろうか、すべての人々が今、なんとか、安保は明日の事だと固く信じようとしている、然し、我々はけっして、〃安保は明日の事なのだ〃と言わないようにしよう。何故なら「安保」は〃明日の事なのではなく今日ここでおこっている事〃だから!!!

(二)「第三期階級闘争」の基本的性格と七〇年安保闘争

Ⅰ(A) 「一方で」「大衆の分解」が音をたてて進んでおり、他方において、「ナショナリズムの抬頭」が、あるべき速度で進んでいる。」 同盟は六七年六月、「総括」No2の主張でこのように述べた。

ナショナリズムは「国内のすべての力（精神的な、物質的な力）を、生産関係、階級関係をのみこんで吸収しようとする。」「この寄生的国家権力が、社会のすべての力を「のみこむ」過程こそは」、まず何よりも「第三期階級闘争」の性格を規定づけるものである。これは、

①、民族的、国家的、国民的共同利害の幻想性（国民的生産力）でもって、諸階級、階層を包括、包摂しようとブルジョアジーがしている時代である。このことは、まさに、国家と資本が、民族的国家的、国民的統治能力を失ったが由にこうならねばならないでいるということを意味している。

②、そうであるが由に、まさに、支配者階級の暴力、国家権力の強化、行政権の強化、拡大、独自化、独立化を当然のものとして生み出さずにはおかないのである。

以上のことは、単なる政治の力学ではなく、はっきりと、一方に於ける資本の集中と集積、その有機的構成の高度化を、他方における「階級、階層の分解と組立化、すなわち「大衆の分解」という、市民社会の根幹的矛盾によってもたらされているものである以上、一歩もあともどりすることの出来ない問題であり、国内に於けるこのような基本要因に規定されているばかりではなく、国際的な資本間競争によってはっきりと規定されている。即ち五〇年代のアメリカ、カナダ、イギリスと、EEC、日本を中心とする二つの経済的主軸を中心にした景気循環（好況と不況）のシーソーゲームがおわり、アメリカ、EECに於ける循環の同時性、不況の同時性が、六四年以降、生まれていることによって一層大きく規定されているのである。

B、これらのことは、次のことをもたらさずにはおかないでいる。

①、「議会制度そのものの役割の変化」である。「過去の時代においては、議会は発展しつつある資本主義の道具として、ある程度まで「史的に進歩的な活動を行なって来た」が、現在では、この役割は、急速に変化、変化しつつあるということである。反動的役割に転化しつつあるということである。

政府、自民党、オレンジアジーは一方で、ナショナリズムの強化を全力をあげておし進めている。そして他方で、金融、財政（国債も含めて）の膨張をとおして、各階級、階層を分断支配しつつある。然し、これは、いずれ、かならず破たんせざるを得ないものであり、ますますそのような方向に傾斜しつつあるし、これは、議会の役割と性格をますます急速に変化させずにはおかない。物的基盤である。米価審議会、人事院勧告その他中間機関、第三者機関のゆきづまりをはじめ、予算、財政政策のはたんは進んでいる、これは日本だけでなく、エアハルトのしっきゃくと西独、フランスとドゴールのゆきづまり、英国と労働党、そしてアメリカとジョンソンといったように、帝国主義諸国に於ける基本的傾向なのである。明らかに議会の位置と役割は変化しつつあり、反動化しつつあるのだ。

②、このことは、当然、五〇年代の民主主義と、大衆組織の性格ばかりではなく、政党の役割と位置を変化させずにはおかないのである。民主主義とは、その形式ではなく、内容、実体こそが問題となりはじめている。形式民主主義にとらわれているかぎり、それは必然的に反動に転化せずにはおかない。これはすべての大衆組織においていえることであり、組織のたてまえを重んじ、大衆の要求をくみあげ、これに依拠しながらたたかわずにはおかないのである。民主主義の内容、大衆組織の内容は、行動団体化、行動団体化以外にありえない。

Ⅰ 現在、すべての議会主義政党は、一方で議会の変化とともに、その神通力をもちはじめている。これこそ、彼等が、議会主義であるがゆえにおちいらずにはおかない必然的なジレンマである。ここからぬけ出すことは、まさに彼等の本質である議会主義を脱皮しないかぎり、

不可能なことであり、一方で反動に転落するか、それとも議会主義をすてきり、大衆に依拠するのかという二者択一をとられているのである。これは全面的なことであり、彼らは、一方で大衆に依拠しようとし、翼賛議会主義的、大衆の自然発生性への接近をするが、他方、議会にとらわれ、反動化する、彼等は、一方でまた大衆をすてきれず一定の進歩性を持ち、他方で、常に反動化する、彼等は常に、この動揺分子としての性格をもちつづけるのである。

Ⓓ 労働組合も又、この議会主義幻想と同様の性格をおびる。然し、労働組合は、直接大衆を傘下においているがゆえに、政党ほど大きなフレをおこすと見ることは出来ない。たしかに現在、労働組合は、各政党やブルジョアジーにつきしたがっている。然し労働者は、社会的矛盾の進行、景気と共に、生活の本質を、はっきりと理解することが出来るようにならざるを得ない。物価をめぐる大衆収奪、増税、そして度重なる新しい政策、合理化、首切り、等は、労働者を、このような方向へみちびかずにはおかないのである。

Ⓔ 以上のことに規定されて、現在日本の政治的諸関係はどうなっているか、それは本年一月の総選挙にみられたところの傾向性をとっているのである。それは①、農民、商人、小企業者をはじめとする新旧中間層の動揺、これは、日本の経済成長の中で、農業、商業をはじめとする「後進産業部門」の変化、中小資本のとうた、吸収、倒産、創業、第三次産業部門としての流通過程の激変、証券業、金融、サービス部門の動揺等々、そして、物価上昇、インフレによるブルジョアの生活苦によって規定されたものである。

②、第二は、民社党を中心とする動揺、これは、農業、合理化を中心とした不安感、花卉と斜陽産業の落差の進行が、三井三池闘争以降はっきりと進んでいること、又、自由化にからまり、国際的、国内的緊張政策のあふりをうけていること、

③、公労協を中心とした、イデオロギー的、行政的、組織的、そして合理化を中心とする攻撃、と、吸収、自滅と、右派の合体した、公労協組織の攻撃、賃金凍結と物価の取り引き闘争の人民への はねかえりと人民の不信である。

④、政治的、組織的に見た場合、特に、現在、①②を中心とする動揺が生まれていることである。これは一月の総選挙においては、自民、社会の後退と、公明、民社、共産の上昇として記録されたのである。

Ⓕ、以上のことから言える「第三期階級闘争」の基本的性格は①「すべての社会的矛盾が極度にからみあっていることである、革命は未増有の大規模な問題となり、局部的な解決ではなく、全面的解決を要求していること。全面的な革命を要求していること、即ち階級闘争は国際的に結合されはじめていることである。

②、それ丈けではなく、各国内部の闘いにおいて、政治闘争と経済闘争がはっきりと結合されはじめていることである。政治的矛盾、経済的、社会的矛盾は一体となった有機的関係をもちはじめていることである。これは、成田、砂川接収業料、物価(公共料金)公害と労働条件、合理化等々ベトナム戦争と国内と合理化、労働強化、統制等々と、相互に密接不可分の関係に立っているし、我々もこれを結びつけてゆく必要性が出て来た。中でも、もっとも重要なことは、すべての政治的諸闘争、諸課題が、はっきりと日韓条約に集約されたことである。六〇年以降我々が一つ一つ闘った個別闘争(政暴法、公安条例、第三次防衛計画、大管法、憲法、日韓、沖縄、原子母、ベトナム反戦、平和運動、沖縄、砂川、成田基地、三井三池、その他、授業料、米ヒ闘争、寮、学生会館、大学自治、そして労働組合における闘いから、反共日防法に対するイデオロギー闘争、組織闘争(ストライキ)が、はっきりと七〇年安保、日本の安全と分位)国内、極東の安全、反共分位と一切の弾圧、抑圧、搾取をめぐる闘いとして、安保闘争に結合されたことであり、「談米談ベト」は、まさに、この七〇年安保を、我々の直正面にすえたことを意味する。

③、現在我々が当面している「第三期階級闘争」の最も実践的な意味から見た基本的性格は、このブルジョアジーの「正面戦」に我々がどのように対応するのか、又、労働者階級はどのように対応すればよいか、又対応するのかということである。

①、我々は、すべての政治的、社会的、経済的闘いを、この七〇年安保との関係ですべて位ちずけ、組みこまなければならない。そしてこれにまきずく、全面的政治暴露を組織しなければならない。この任務は、現在、政党にとって決定的な生命線を決めている。党は、この任務を、中央の任務として組織する。故の「正面攻撃」「正面戦」に対して、この全面的政治暴露を、直正面にかかげ、系統的に、この運動をつづける。「文化」、組織運営の配布、「右翼ビラ」の配布、これを各級機関はだんことして、保障し、忍耐不抜の運動をつづける。大衆は今、政党が何を考え、何をめざしているか、自分達は今どこにおり、何をなすべきかをしりたがっている、大衆は今、はっきりとした、だんことした政党の指導を要求しているのだ。

Ⓘ 我々は今、全面的、政治的学習を要求しているのではない。議会主義政党が、動揺し、裏切り、反動化し、大衆の自然発生性に依拠しようとしてより労働組合もそうしている時、我々は、社会主義、労働運動との結合が、「大衆ビラ」による全面的政治的暴露だけでは不十分であり、忍耐不抜の組織活動を要求していることを、はっきりと自覚しなければならない。大衆は、明らかに、静かに、ゆるやかに上向しつつある、これをはっきりとした長期と組織に高め、そくしんしなければならない。政党、労働組合幹部は、動揺している、だからこそ、我々は、それぞれの職場、地域、学園で、組織活動をつづけなければならないのだ。それぞれの職場で、行動団体をつくりあげよ、集会、ビラまき、デモ、どのように低いところからでも組織化を進め、自治的組織性を、はっきりと外部から注入せよ、民間本部より、産業労働の組織労働者をこのようにして高めなければならない。

Ⓙ 国労、動労、陸運、港湾の、ベトナム戦争重要物資の輸送をしている労働者、そして、ベトナム戦争反対、物資の生産にたずさわっている、機関、化学、金属、センイ、食品関係の労働者は、特に、生産、輸送拒否のために全力をつくさなければならない。これらの産業や企業で働いている労働者は、いやいやながらしているし、今後、ますます、いやいやながらして来るのだ、毎日、自分がつくった兵器で人が殺されていることは、絶対的に、我慢をいやにさせずにはおかないのだ。

Ⓚ 我々は、Ⓘ、Ⓙ、Ⓚの任務を組織的にとりくまねばならない。そして、この闘いを最もすみやかに、効率的におし進めてゆくために、党は、組織的に、はっきりと、規律と準備をととのえた「戦闘隊」を、教育力に対していとまねばならない。この任務は、社会主義学生同盟、学生細胞、全学連が果さなければならない。何故なら、教育とブルジョア、イデオローグの攻撃と、議会主義政党、労働組合幹部の動揺と裏切り、そして労働者大衆のとまどい、ちゅうちょを、ぬぐいさり、ブルジョアジーの正面攻撃に対して、はっきりと見をひけさせるためには、今どうしても、この「戦闘

然を、自己犠牲的に斗う必要があるのだ。10/8斗争は、拡大、固大、立命、大阪市大そして、戦闘的労働者、インテリのあいだで産婆として、無条件支持されている。我々は、10/8斗争の反動を各分野ではっきりとのりきっている。

我々は10/12を第九斗争として斗うべきである。これら、10/8斗争から必然的に導かれる方針である。又問題はそうならざるを得ないばかりか、これを目的意識的に進めたものだけが生きのこる。大衆の支持を獲得することが出来るのだ。

我々は、11/12佐藤訪米実力阻止斗争、安保条約粉砕、七〇年安保粉砕を掲げ、大衆の中で、準備として「試験」実力阻止斗争を斗う必要がある。ことを公然と主張し、これで大衆を結集し、組織し、説得しなければならない。この闘争に勝つ為に、何があるというのだ。党は、青年、学生に、最も高い理念と偉大な情熱にうったえる以外に何があるか、党は、青年、学生に、自己犠牲を要求する。日本の政治と日本の階級斗争、いや世界の労働者階級のために、この我々が主張している「第三期の階級斗争」は、植民地、被抑圧民族ばかりではなく、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリスをはじめとして、すべての国で、人民の、特に青年学生の自己犠牲を要求している。共産主義者同盟は、けっして、この要求を、かくさない。同盟は、青年、学生の自己犠牲的な斗いを要求する。

我々の政策から人民を切り、概念の議会主義政党と、労働組合員の動揺と裏切りを断ち切り、労働者階級のちゆうちょ、日和見性をはらいのけ、我々の「正面戦」、「正面突破」に、はっきりとしたがうようとさせるために、この自己犠牲は必要である。

労働者階級は、今、静かに、ゆるやかに上昇しつつある。議会主義政党、労働組合員党は、七〇年安保にむけて、動揺と裏切りをくりかえすだろう、青年、学生の自己犠牲的な斗いは、けっして敵流をうすめつくり出すことはないだろう、現実は重たいのだから、資本主義の鉄鎖は強いから、労働者は今すぐに、今度は俺らの番だ！と言って、陽気に起ち上りはしないだろう、然し、青年、学生の忍耐不抜な、自己犠牲的な斗いが、党の「あざやかな全面的暴露」と、準備としたる場のもとに斗われ、各工場や、地域でのねばり強い組織化と結びつけられたならば、労働者階級は、静かで、ゆるやかかつもしれないが、確実に、その隊列をととのえるだろう。七〇年安保にむけて、労働者は、がまんにがまんをかさねるほどに、その戦列を固め、拡大するにちがいない。

青年、学生は、11/12、訪米阻止斗争を、なんとしてでも斗わなければならない。七〇年安保は、決して、明日のことではなく今日のことなのである。

(エ) 「第三期階級斗争」とは、一方では、産業資本主義から現在までの、古典階級斗争の「第三期」であり、又、戦後階級斗争の「第三期」である。この「第三期」階級斗争の基本的生格を、我々は、「階級斗争の国際的結合」「政治斗争と経済斗争の結合」の時代ととらえる。そして、この斗いは一方で、古典革命、暴力革命、議会制度の廃止、私有財産制度の廃止を要求すると同時に、他方では、全面的政治暴露と、実力斗争、すべての大衆組織の行動的団体化を要求するのだ。

(オ) 七〇年安保は、政治、経済、軍事の政治、反共主義という、原則的な問題が、現実の政治斗争として、ぶつかってくるのである。そしてこれに対して議会主義や平和主義では、どうすることも出来なくなってゆくのである。今、政党の指導活動は、労働者の主体性をふまえているのである。

(三) 七〇年安保と政治的諸問題

① 七〇年安保とベトナム戦争については、「烽火」No2主張II、ベトナム戦争に対する我々の態度は、「烽火」No43、44合併号と、No45を読み、

② 七〇年安保と「中国」は、「烽火」No3～No4を読みなさい。

③ 七〇年安保と「沖縄、小笠原問題」「烽火」No2、No4、「火花」日本革命

④ 七〇年安保と反戦 ―― 無政(潜在的)

⑤ 七〇年安保と、アメリカ黒人運動「烽火」No3 No4、

⑥ 七〇年安保については、「烽火」No3主張、No4学社

⑦ 学生については、「火花」No2、No5をみよ。

⑧ 11/12学生集団は、「烽火」No5でのせる。

⑨ 党的主張については、「烽火」No5でのせる。

⑩ 「試験」「試べ上」については、「火花」各号と「大衆ビラ」

―――――――――――――――――――――

これらの七〇年安保を中心とする諸問題については、近日中にまとめて文書として発行する。それまでは以上の主張にもとずいて組織すること。

(四) 組織問題について とくにジンコール

現在、我々同盟にとって、極度に重要なことは、各級機関として、組織体制をととのえることである。大衆組織にまいぼつしないように、組織は政治的、組織的独自性を保持しなければならないのである。

党の中ストウは、一切の準備にたえうる体制をつくらなければならない。

① 機関紙、「火花」、「烽火」、「大衆ビラ」の配布体制を再点検せよ。

② 各級機関、組織は、政治討論を進めているか、全面的状況と、大衆の動向を掌握しているか、党の方針はどこまで、どの程度、活動家の胸にきざまれているか、再点検せよ！

③ 党の方針を検討し、確認せよ！ 各級機関は、その討議をしっかりと守らなければならない。

④ すべての大衆組織を行動的団体化せよ。

⑤ 我々は次のスローガンにもとずいて活動せよ！

(一) 佐藤訪米阻止！ (一) 安保条約即時破棄！

(一) 佐藤政府打倒！ 政治的自由の獲得！ (一) ベトナム侵略阻止！

(一) 兵器・核爆の生産・輸送拒否！ (一) 米軍政打倒！

(一) 沖縄軍基地撤廃！ (一) 満州条約破棄

(一) 原潜、原空母入港阻止！ (一) 小笠原区制撤廃！

(一) 国防会議の見直し、破防法、デモ規制、破防法、大学法阻止、協約

(主) 「火花」No5が二つ出ているから今号は6号とする)